
命の蠟燭

赤玉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の蠟燭

【Nコード】

N6921Q

【作者名】

赤玉子

【あらすじ】

男の前に鬼が立っています。

鬼は男に選択肢を提示します。

その中に、間違っても選んではならぬ選択肢が混じっています。

鬼はそれを巧妙に選ばせようとするでしょう。

男はそれに、抗うのです。

しかし……。

女は首と肩の間に挟んだ携帯電話に向かって怒鳴り声を上げていた。

「ええ、ですから緊急なんです！ 先ほど申し上げたようにですね！」

その拍子に、鞆から取り出した鍵がするりと手の中から落ちた。女は舌打ちをして、板張りの床からそれを拾い上げる。靴に爪先を入れ、ヒールを踏み潰す勢いで踵をねじ込んだ。

「……クソ暇なんで切ります！」

女は返事を待たず携帯電話を畳んだ。家を出て扉を閉め、鍵を指し込もうとしてまた落とす。女の口から汚い言葉が漏れた。ひつたくるようにそれを拾い706号室を施錠すると、鍵をバッグに放りこんでエレベーターまで走り、鬼の形相で「←」のボタンを連打する。しているとポケットの中の携帯電話が再び着信を知らせるメロディーを奏で始め、女は眩暈を覚えながら電話を開いた。

「クソ暇だつて言つてんでしょ！」

「坂手様の電話でよろしいでしょうか」

電話口に出たのは、若い女性の声だった。

女は相手が誰なのかを悟った。途端にシン……と静かになり、やがて、弱々しい声でこう尋ねた。

「それで、主人の容体は？」

男が目を覚ますと、目の前に赤鬼が立っていた。

鬼はひよろりとした長身で、ダブルのスーツでめかし込み、銀縁の眼鏡なんぞをかけている。赤い肌と尖った耳、禿頭の頭に伸びた二本の角を除けば、その佇まいは人々が抱く「鬼」のイメージからおよそ遠かった。

「おはようございます」

鬼が挨拶をした。どうしたのかな、これは、と男は思った。立ち上がるうとして、自分が椅子に縛り付けられている事に気付く。男が鬼の顔を見上げると、親しげな笑みがそこにあった。

「初めまして。わたくし、赤鬼のダマダマと申します」

「はあ」

男は生返事をした。

このような時に上手く切り返せるほどのユーモアを、男は持ち合わせていなかった。

「ご自分が置かれている立場を理解しておいでですか？」

「いや全く」

「そうですか……。まず、あなたはそのままでは死にます」

鬼が残念そうに首を振りながら言う。流石に男はぎょつとした。

しかし、同時に納得もした。なるほど死の淵に立たされれば、人間、鬼ぐらい見てもおかしくないかも知れない。

それにここで目覚める前の記憶は、横断歩道を渡っているところで途切れている。それはつまり、そういう事なのだろう。

「ところで坂手様。命の蠟燭をご存じでしょうか」

唐突に鬼が切りだした。男が顔を上げると、鬼は親しげに首を傾げる。

「命の蠟燭？」

「さようでございます。豚や鳥、牛や魚の死骸を砕いて混ぜたものを棒状に整えます。あなた方人間の命は、その一本の棒の先端に灯として宿るのです。当然、その揺らめきはあなたにも与えられて御座います……」

鬼は、どこからともなく蠟燭を取りだして、男の前に掲げて見せた。それは小皿に乗っていて、先端で豆粒のような炎が今にも消えそうに揺れている。

「こちらが、命の蠟燭に御座います」

「……まだ消えてないな」

「ええ、消えてません。まだね」

鬼が意味深に唇を歪める。その表情に、男は警戒を抱いた。

「ご自分の置かれている立場を、理解していただけたでしょうか？」

「つまり……生きるか死ぬかは、あんた次第だと？」

「いいえ違います」

鬼は男に顔を近づけて、にんまりと笑う。

「あなた次第ですよ」

女はエレベーターから飛び出した。アイシャドウが涙で滲んでいく。住宅街を抜けるとすぐ駅前だ。横断歩道が丁度青だったので、女は走った。その拍子にポケットから携帯電話が落ちる。女ははつと足を止めたが、信号が点滅を始めたので構わず走った。ロータリーは目の前だ。停まっているタクシーはいない。女はタクシー乗りに駆け寄り、泣きそうな顔で手を上げた。何度も何度も、強く右手を天に突き出して主張した。空のタクシーが現れるまでに、五分かかった。

タクシーに乗り込むや、女は涙混じりの声で言う。

「死ぬほど病院に行きたいの」

ロータリーを出るため、ハンドルが急ピッチで左に切られる。

「……つまり、あんたらの上司である悪魔の一人が、至急人間の魂を欲しがっている」と

「さようでございます。しかし本来悪魔は、この命の蠟燭の灯が理に従って消えた人間の魂のみを手に入れる事ができます。自分で殺して出した魂を持つ事は許されないのです」

「そこで俺か」

「そこであなたです」

事のあらましを鬼から聞かされた男は、深いため息を吐き出した。緊張感の滲むため息だった。

「凶器も方法も、全て此方が提供します。あなたはただ殺せばいい」

「理に従って灯が消えなきやダメなんじゃないのか？」

「殺されたり自殺したりした場合は話が別です。そして今回私の上司が欲しがっているのは、そういった魂なのです」

「でも、人殺しなんて……」

「山梨辰夫。六十七歳。住所不定無職」

鬼が羊皮紙のようなものを縦に広げて読み上げると、男はまた項垂れてため息を吐き出した。

「ホームレスですので、此方の指示に従っていただければ死体が見つかる事 shouldn't でしょう」

「……つまり、その、山梨さんを殺せば、俺は死なずに済むと？」

「ええ、それはもちろん。本来はタブーなのですが、蠟燭の灯に干渉する秘密の方法がございます」

「でも……」

男は沈黙した。拒む言葉が思い付かないのだ。

「すぐにはお返事できないでしょう。しかし残された時間はごく僅かです。早く決めていただかないと……」

「……分かってるッ！」

男が怒鳴ると、鬼は静かになった。男の震えた呼吸だけが残る。やがて蚊が鳴くような声が喉の奥から絞り出された。

「その、指示に従えば、大丈夫なんだな……？」

「大丈夫です」

「……殺せば、助かるんだな？」

「もちろん」

「……」

男はもごもごと口を動かすと、ささやかな声で妻の名を口にした。そして出た言葉はこうだった。

「しにたくない」

さようで御座いますか、と鬼は笑う。

「死なないで」

女はタクシーの中で呟いた。病院はもうすぐそこだ。
信号が青に変わる。運転手がアクセルを踏むと、タイヤが乱暴に
回転を始める。

「奥さんもお喜びになりますよ」

「いや、妻は喜ばないよ」

鬼は笑顔で首を傾げる。

男は震える声で言った。

「あいつは人殺しを愛せるほど、器用な奴じゃない」
「ほう」

「俺もそうだよ。人殺しを許せるほど、器用な人間じゃない……」
男は長いため息を吐き出した。様々な感情を、その一息にて身体
の中から押し出したようだった。

「乗らないよ、その話」

「やせ我慢だ、と男は思う。」

でも男には、このやせ我慢は誇っているかと思えた。

「ふむ……そうですか。3、2、1」

鬼が蠟燭を持ってカウントダウンを告げた。すると、豆粒のよう
な蠟燭の灯が、ふっと風に吹かれたように消えた。男はそれを見て、
感じた事がないほどの喪失感を味わった。

「たった今、お亡くなりになりました」

「……そうか。俺、死んだんだな」

「はい？ 何を仰っておられるのですか？」

鬼の意外そうな声を聞いて、男は呆けた顔で鬼を見上げた。

「この命の蠟燭は、あなたの奥さんのものですよ？」

——男の背筋が凍る。

「乗っていたタクシーが交通事故に遭いまして……残念なことです」

「し、死ぬのは俺じゃないのか」

「ええ、確かに、あなたはあのままでは死ぬところでした。しかし
執刀医の腕が良かった。ああ、言い忘れておりましたが、あなたは

助かる運命だったのですよ」

「そんな……いや、ちょっと待て、だってお前、俺の蠟燭だって……！」

「そのように申し上げた事は一度もございませんが」

鬼はにつこりと笑って言う。その笑顔を見て、男は悟った。鬼は事実を告げているに過ぎないのだ。取り返しのつかない、事実を。

男の目にはたちまち涙が浮かんだ。

「さて、残された時間は本当に僅かです。本来はタブーですが、灯の消えた蠟燭に再び着火する秘密の方法が、わたくしどもにはあるのです。それで、お心は決まりましたか？」

男は何度も頷いた。それは肯定ではなく懇願だった。

ありがとうございます、と鬼は恭しくお辞儀した。

《了》

（後書き）

次はもっと面白い小説を書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6921q/>

命の蠟燭

2011年4月23日17時55分発行